

救命意識も「普及」

県内 AED 講習

5年で11万9000人受講

心肺停止状態に陥った人の心臓に電気ショックを与え、拍動を再開させて救命する自動体外式除細動器（AED）の一般使用が2004年7月に認められて以降、使用方法を学ぶ消防署主催の講習を県内で受けた人は、少なくとも延べ11万9千人に達したことが、琉球新報の調べで分かった。県内各消防本部などによると過去2年間に一般人がAEDを使い救命措置を施した結果、一命を取り留めたケースが少なくとも6例あり、消防では普及啓発をさらに広げる必要性を強調している。

08年1年間の受講者数を3・36%に対し、沖縄は2人口比でみた場合、全国の07%と低い。県内での普

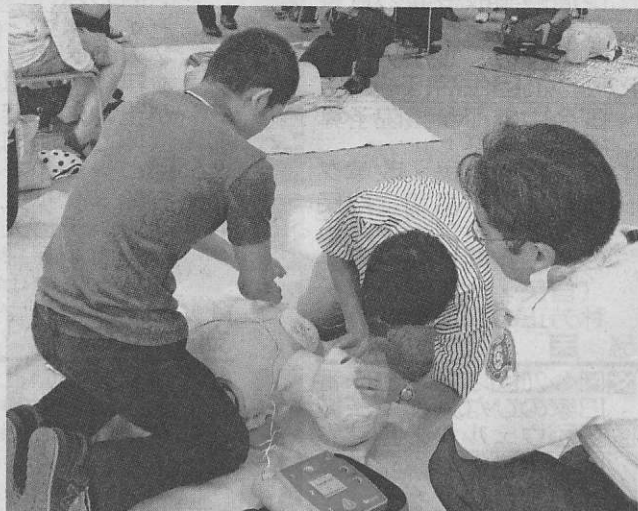
及について、那覇市消防本部は「救命意識が高まっている」と指摘する一方「救命動作はいざという時に忘れがちで、できれば最低、

年に2回は受けてほしい。まだまだ啓発が必要だ」と話している。05年から5年間の消防庁の統計や県内18の消防本部へのアンケートによると、この5年間の受講者は延べ11万9307人に上った。また、県の調べでは、AEDの設置台数は08年12月末現在1214台で、前年07年9月末の調査時より1・6倍に増えていた。

消防本部へのアンケートなどによると過去2年間に一般の人がAEDを使用し、救命した事例は少なくとも6件あり、6人が一命を取り留めた。09年に久米島で、運動競技中に意識をなくした50代男性に対し、居合わせた20代30代の男女が心肺蘇生法とAEDの使用を施し、意識を回復させた。07年9月には、竹富町小浜島のリゾートホテルで47歳の女性が心肺停止となり、ホテル従業員がAEDを使用して意識を回復させた。那覇市消防本部の徳元律

夫救急課長は「倒れた人と居合わせた場合、まずは119番通報を。救急車が到着するまでの間、心臓マッサージと人工呼吸による心肺蘇生法を実施しながら、近くにAEDがあれば適切なタイミングで使うことが重要だ」と話している。

（新垣毅）



一般県民がAEDの使い方を学ぶ救急救命講習会
112009年夏、那覇市消防本部講堂

用語 AEDの一般人使用 2004年7月に認められた。全国で毎日100人近くが心臓突然死しており、その7、8割が、電気ショックで心室細動を除去すれば、命が助かる可

能性があった。ただ除細動が1分遅れるごとに救命率は約10%ずつ低下する。通報から救急車到着まで全国平均で7～8分かかるため、居合わせた一般の人の処置が重視されている。